

「必要感」を大切にした授業で 学び方の土台をつくる

長野県 安曇野市立穂高東中学校

「自律した学習者を育てるには、学び方を指導する前に、まず生徒の心を動かす授業が大切」と語る安曇野市立穂高東中学校の松島千尋先生。先生が授業で何よりも重視するのは、生徒自身が英語を学びたいと思ひ、話したり書いたり動き出すこと。英語が苦手な生徒の心に火を付ける工夫を聞いた。

●背景

「英語なんて」と言う生徒に
必要感を持たせたい

安曇野市立穂高東中学校の3年生の英語の授業。松島千尋先生に伴われて、外国人ゲスト5人が教室に入ってくると、待ちかねていた生徒の間に軽いざわめき起きた。ゲストは、松島先生に招かれた信州大教育学部の教員と留学生で、1グループに1人ずつ入り、生徒とコミュニケーションを楽しんだ。

「Let's enjoy talking!」という松島先生の掛け声と共に、生徒とゲストの会話が始まる。

生徒は練習どおりに自己紹介をした後、各自で持ち寄った「日本の風物」をゲストに紹介していく。将棋盤や蚊取り線香、梅干し、団子、アニメのキャラクターなど。持ち寄ったものは実にさまざま（写真）。

「What's this?」

気軽に話し掛けてくるゲストに、生徒は身振り手振りを交えて、たどたどしい英語ながらも、用意したものを熱心に紹介する。

「This is wasabi.」

「Can you play shogi?」

分からない単語が出てきたら、グループの生徒がすかさず辞書で調べてサポート。仲間

School Data

◎1954（昭和29）年に穂高中学校として開校、2001年に穂高東中学校・穂高西中学校に分かれた。生徒全員が生徒会活動に参加し、あらゆる場面でルールを厳守する「ゼロ活動」を推進。規律ある学校生活の実現を目指す。



校長◎太田壽久先生

生徒数◎539人 学級数◎19学級（うち特別支援学級2）

所在地◎〒399-8303 長野県安曇野市穂高 5119-2

TEL◎0263-82-2230

URL◎http://www.city.azumino.ed.jp/east_jhs/

公開研究会◎未定

と協力しながら、生徒は初対面の外国人ゲストとの初めてのコミュニケーションを深めていった。

この授業を松島先生が企画した背景には、全ての生徒に英語を学ぶ「必要感」を持ってほしいという思いがある。

同校は、保養地や観光地として知られる安曇野市の東部に位置する公立中学校だ。近くには温泉や牧場、美術館がある一方、新興住宅地もひしめく。かつて荒れていた同校は、10年程前から生徒指導を徹底すると共に、小中連携の充実などを図ってきた。しかし、松島先生が赴任した5年前は、学校はまだ落ち

「自律的な学習者」を育てる学び方指導



写真 生徒と外国人ゲストの交流。松島先生が信州大教育学部附属松本中学校に勤務していた頃の人脈を生かして実現した

着いた状態ではなく、生徒を席に着かせることに時間が掛かり、授業を進めるのは容易ではなかったと振り返る。

「学習意欲が低く、英語なんか必要ないと思っている生徒に、どんなに熱心に指導しても、受け入れてもらえないという状況でした」
 学校が落ち着いた今も、「英語なんて必要ない」と言う生徒もいる。また、英語の学習が大事だと分かっているにもかかわらず、やりがいを見いだせず、苦手意識を抱えたまま卒業する生徒も多い。それらの生徒たちが、英語に向き合うためには何が必要なのか。松島先生は、生徒が自ら「英語を学びたい」と思うような教材や場面設定を工夫することだと考えた。

「高校受験という目前の目標ではなく、その先の将来を見据えた指導が大切です。教師の熱意や愛情、信念が生徒に伝われば、それが生徒のやる気となり頑張れるようになると思います」（松島先生）

●学習に向かわせる工夫①

「伝えたい」という強い気持ちが生徒の「学び方」も変える

松島先生が授業づくりで最も大切にしているのは、生徒に英語を話したいと思う状況をつくることだ。

「どの教科にもいえることですが、『学びたい』という心が育っていない生徒に、どんなに学び方を指導しても身に付きません。生徒が話したいこと、書きたいと思えるようなことは何か。生徒が何を望んでいるのかを考えて、それにふさわしい教材や場面に探し続けるよう心掛けています」（松島先生）

その工夫の1つが、冒頭に紹介した外国人とのコミュニケーションだった。

「教科書では、必ず日本の風物を扱います。しかし、友だち同士でペアワークをしても、たいがいの『日本の風物』は知っているので面白くありませんし、伝えようという気持ちもあまり持てません。しかし、自分のお気に入りのものについて何も知らない外国人に紹介することになれば、活動に対する必要感が生まれ、意欲が高まると思います。授業では、



安曇野市立穂高東中学校
松島千尋 まつしま・ちひろ
 英語科。「生徒にはさまざまな可能性がある。英語を学びながら感性を磨き、社会に大きく羽ばたく人を育てたい」

生徒が伝えたいことを大切にするために、まず紹介する内容を日本語で書かせます。そして、その内容を出来る限りシンプルな英文に直していくのです。外国人に自分の伝えたいことが伝わった、相手が言っていることが分かったという体験は、生徒にとって大きな自信になるでしょう」

事実、今回の活動では、松島先生も予想しなかった生徒のやる気が見られた。

ある生徒は、1・2年生の時には英語の授業にあまり熱心ではなかったが、自分が熱中している空手のことを伝えたいと考え、外国人にも分かりやすいように何度も英文を修正し、ペアワークで紹介の仕方を何度も練習した。ほぼ英文は出来上がっていたが、本番前に黒帯になり、そのことも伝えたいという思いから、英文を全て書き直した。

また、テストでいつも平均点以下だった生徒が、活動中に「○○を伝えたい時は英語で何て言えばいいの？」と、松島先生や仲間によく質問する姿も見られた。

「生徒が自分の思いを何とか英語にして伝えようとすると感動しました。また、何度も辞書を引いたり、教科書の例文を見たりし

ながら英文を修正するうちに、語彙力や英文の力が伸びていることに驚きました。教師にやらされていたり、自分が関心のないテーマだったとしたら、ここまで粘り強く英文を修正しなかったでしょう。『何としても伝えたい』という気持ちで、英語に向き合う気持ちだけでなく、その学び方も変えることを実感しました」と、松島先生は手応えを述べる。

題材には道徳的なテーマを選び、生徒が書きたい、話したいという気持ちにさせる。ある授業では、写真家のケビン・カーター氏がスーダン内戦の惨状を伝えようと撮影した「ハゲワシと少女」を題材とした。カーター氏は少女を助けるためにまずハゲワシを追い払うべきだったのか、ハゲワシを追い払わなかったからこそ、あのような写真が撮影でき、スーダンの現実を世界に知らせることが出来た功績を称賛すべきなのかを各自が考え、その思いを英語で表現させた。「面倒くさい」と言っ

て嫌がる生徒は1人もいなかったという。「道徳的なテーマは自分の考えを持ちやすいので、書きたいという思いを喚起できます。道徳の授業ではないので、どのように感じたのかを深く掘り下げるのではなく、まずは内面で感じた思いや考えが表現できているかどうかを見ている」（松島先生）

題材選びで先生がもう1つ意識するのは、教科書にこだわらず、生徒のためになると思った題材を積極的に活用することだ。「ハ

図 「イングリッシュ・タイムズ」



「イングリッシュ・タイムズ」は生徒の感想を共有し、自己肯定感を高めることがねらい。自分の感想がここに載ることが学びの1つのモチベーションになっている生徒もいる。また、生徒が活用した表現を紹介し、興味のある表現はそれぞれの「マイ・ツールボックス」に入れておくように指示している
*同校の資料をそのまま掲載

ゲワシと少女」は指定外の教材に掲載されていた写真だが、同校の指定教科書に載っていた「We Are The World」の歌詞からアフリカの貧困の話題を掘り起こし、「ハゲワシと少女」につなげた。「教師が常にアンテナを広げて、生徒の心を揺さぶるような教材を探すことが大切です」と松島先生は強調する。今後も、環境問題や人間関係などに思いを向けさせていきたいと話す。

●学習に向かわせる工夫②
生徒が安心できるクラスづくりが
他の生徒から学ぶ姿勢につながる

松島先生が授業づくりで意識する2つめのポイントが、クラスづくりだ。良い題材を与えても、間違いを受け入れる雰囲気がないと、

生徒は委縮し、英語を使おうとはしなくなる。英語を安心して使える環境とするために、授業でどのようなことが印象に残ったのか、難しくかったのか、互いの理解を共有しながら、生徒同士の人間関係を構築していくような取り組みが重要だと考えた。

松島先生がクラスづくりに活用するのが、1単元に4〜5回発行する教科通信「イングリッシュ・タイムズ」だ。授業のポイントと、授業に対する生徒の感想を紹介する(図)。

「開かれた人間関係でなければ、皆の前で英語を使う気にはなりません。友だちの考えを知り、互いの気持ちに分かるようになれば、一人ひとりが安心していられるクラスになります。英語の学力向上とクラスの人間関係づくりは、授業の中で密接にかかわっていると

「自律的な学習者」を育てる学び方指導

考えます」(松島先生)

「イングリッシュ・タイムズ」は、生徒の努力や成長を認める場でもある。例えば、生徒が書いた英文を載せて「A君は今日こんな英文を書いていました」と紹介したり、「今日の活動で、Bさんがこんなことを言いました」と生徒の授業の感想と松島先生のコメントを載せたりしている。

「生徒が授業中に感じたこと、分からなかったことをクラス全体で共有することで、理解が更に深まると考えています。学年が上がりが内容が難しくなると『自分だけが理解していないのかも』と不安になる生徒もいます。生徒が言えなかった質問や間違いを『良い題材』として教科通信に活用すれば、『自分も授業に参加している。認められている』という気持ちになるでしょう。そうした自己肯定感が『他の生徒の学びからも学ぼう』という意欲や姿勢につながっていきます。生徒の学び方を変えるためには、まず、その生徒の学習に向かう気持ちや意欲から変えていくことが大切だと思うのです」(松島先生)

●学習に向かわせる工夫③

体験と教科書を結び付け 生きた知識にしていこう

松島先生は、学び方の土台となる「必要感」や「自己肯定感」を高める授業づくりと同時に、基礎学力が身に付いていない生徒に対す

る具体的な学習法も指導している。

「マイ・ツールボックス」は、教科書や参考書などに出てきたお気に入りの英語表現をストックする、自分だけのツールボックスだ。必須の表現は松島先生が出すので、基礎は確実に押さえられる。このツールボックスにストックした表現を、あるトピックについて5分間で英作文を書く「5分間英作文」に活用する。マイ・ツールボックスを意識的に活用させることで、情報のアウトプットとインプットを何度も往復し、理解を定着させていく。マイ・ツールボックスは、基礎学力を高めていく上で重要な役割を果たしている。

活動の振り返りも重視する。冒頭に紹介した外国人ゲストとのコミュニケーションでは、次の授業で振り返りを行った。活動中に困ったことは何か、どういう言葉が通じたのかをワークシートに書き、それらを文法事項に照らし合わせながら、生徒全員で確認していく。例えば、「これを食べたことがあるか」という文が出てこなかったという振り返りに対し、「現在完了形を勉強したよね」というように、体験を教科書に結び付けて、生きた知識として定着させていく学習の仕方だ。

●成果と課題

人と人とのつながりが 自律的な学習者を育てる

一連の指導により、生徒の学力は確実に上

がっている。

「グローバル社会で大切なのは人と人とのつながりです。つながりの中で何が自分に不足しているのかに気付き、自分にとって必要な学び方も模索するようになるのだと思います。だからこそ、Heart to Heartで人とつながれる力を、授業を通じて身に付けてほしいと思っています。生徒の心を動かすような授業、生徒が自分の成長を実感できる授業をこれからも目指していきます」

松島先生が
考える

自律した学習者の育て方

自律した学習者を育てるためには、何よりも生徒の心を動かすような授業が必要です。大人は時として、『勉強はしないといけないものだから嫌でもやらなくてはならない』というように生徒を納得させようとします。また、高校受験が近付けば、嫌でも勉強せざるを得なくなるでしょう。しかし、無理やりやらされる学習では、生徒は心の底から学ぼうとは思いません。

英語が楽しい、必要だと感じてスイッチが入った時、生徒は自ら意欲的に学び出し、受験勉強にも前向きに取り組めるようになるのです。